

『御披楽喜』 作・中屋敷法仁

【登場人物】…神奈川美術大学「蛇ノ目梯」ゼミ じやのめてい

赤根衛門 あかねえもん 美術学部絵画学科油画専攻

宇丸完次 うまるかんじ 美術学部映像学科写真専攻

角下都盛 かくしたつもり 美術学部工芸学科彫刻専攻

鹿伏太郎 かぶせたろう 美術学部絵画学科油画専攻

黒渦未唯 くろうずみい 美術学部映像学科写真専攻

志免千八重 しめちやえ 美術学部絵画学科日本画専攻

瀬条 一 せじょう はじめ 美術学部絵画学科油画専攻

盾子守太陽 たてこもりたいよう 美術学部情報デザイン学科

筒美小梅 つつみこうめ 美術学部絵画学科油画専攻

戸白世名 とじろよな 美術学部工芸学科版画専攻

姫益 密 ひめます ひそか 美術学部情報デザイン学科

比良木安示 ひらきやすし 美術学部漫画学科漫画専攻

房毛流桜 ふさげるお 美術学部工芸学科彫刻専攻

舞台上に集まる、かつてのゼミ生13名。  
郡唱が始まる。

「絵画、小説、写真、音楽、  
映画、彫刻、ダンス、演劇。  
絵画、小説、写真、音楽、  
映画、彫刻、ダンス、演劇。

芸術を生み出すことは、芸術家の一側面だ。  
芸術は、「愛」か「死」それとも  
芸術は、「愛」と「死」すなわち  
「生命」を主題とする。

絵画、小説、写真、音楽、  
映画、彫刻、ダンス、演劇。  
絵画、小説、写真、音楽、  
映画、彫刻、ダンス、演劇。

芸術を生み出しながら、芸術を生み出しながら  
「生命」の在り方について、沈黙考するのである。  
それこそ芸術家。

私もまた例外ではない。こうして君たちの目の前に、  
老いさらばえた肉体をさらす、おぞましい羞恥に耐えながら、  
「生命」の在り方について、沈黙考するのである。  
それこそ芸術家。

「恥の多い生涯を送って来ました」  
これは太宰治。  
わが人生を誇りに思う。そんな人間などいない。  
わが人生を恥じらうばかり。そんな人間ばかり。  
「生命」の在り方について、沈黙考するのである。  
それこそ芸術家。

実は私は生きている間の栄華・栄達は諦めている。  
いつまでたっても欲求不満。己の浅学非才を罵り、絶望のうちに死ぬだろう。  
さて、いくら「長生き」してみても、虚しさからは逃げられん。  
ならば、私の望みは、只ひとつ。  
健やかなる「長生き」ではなく、悠然たる「長死に」だ。  
「長死に」…ああ、つまらん。つまらん造語。

精神的に、肉体的に、生きられる時間。それには限りがある。  
生きてる間に生み出してきた作品が、  
生きてる間にのたうちまわった活動が、  
死してなお、いや死すればこそ、後世に強く、  
その影響を与えることができる。

「ぼくは不完全な死体として生まれ  
何十年かかって完全な死体となるのである」

これは寺山修司。

死体は何も語らない。が、その死を人々が語ることで、  
いつまでも生き残る…もとい、死に続ける事ができる。  
それこそ「長死に」「長死に」…ああ、つまらん。つまらん造語。

私など、あと数年もすれば死ぬだろう。いや来年、死ぬかもしれない。  
いや明日、死ぬかもしれない。もう死にかけているかも知れない。  
しかし私がこの世に遺した作品が、  
しかし私がこの世で起こした活動が、  
後世の芸術・文化の発展に寄与貢献できればと切に願う。

さて、学生諸君。大学で教鞭をとってすでに30年。  
私の「教え子」と呼ぶべき人間は、この世に2000人はいるだろう。  
しかし君たちに、しかし君たちに、私の最後の教え子となる、  
かもしれない君たちに、私を「長死に」させる役目を与える。  
ぞ？ よろしいか。

横須賀中央銀行横須賀支店。

私のポケットマネー日本円。4億円。  
君たちの私への、絶対的な尊敬の念、  
君たちの芸術への、妄信的な博愛の念、  
そして…これが肝心だ。そして…君たちの、

将来への、  
漠然とした不安と焦りと苛立ちをアルコールとセックスとドラックで  
誤摩化し、お互いの心と体を傷つけ合いまた慰め合うことでは  
「生命」の実感を分かち合えない「愛」も「死」も品性のカケラも無い  
下劣極まりない哀れな友情とやりに期待して、この金を託す。

日本芸術省・芸術交流大使。 神奈川美術大学・彫刻科教授。

神奈川文化芸術評議会・評議委員。

我らが恩師。彫刻家。天才・巨匠・蛇ノ目梯」

群唱を終えたゼミ生13名。

鹿伏と瀬条が語り出す。

瀬条 「これが先生の遺言か」

鹿伏 「これが先生の遺言状」

瀬条 「我らゼミ生、13名」

鹿伏 「天才・巨匠の最後の弟子」

瀬条 「恩師の名声、世に残すべく」

鹿伏 「その財産を託された」

瀬条 「しかしどうして、今になって、  
先生が死んで十三年目に出てきたんだこんなモノ…」

鹿伏 「俺が隠していた」

瀬条 「ニヤロメ！」

鹿伏 「この大事業、とても俺一人で抱えきれぬ代物ではない。

俺の社会的地位、権力を手に入れる今日まで隠しておいた」

瀬条 「どうして俺たちに語る」

鹿伏 「昔のよしみに頼り同期十三人で成し遂げたいと思ってね」

瀬条 「お前一人でやれば良いモノを。他人を巻き込む魂胆は読めた」

鹿伏 「何かあったら」

瀬条 「責任転嫁」

鹿伏 「敵前逃亡」

瀬条 「トリエンナーレ」

鹿伏 「今宵」

一同 「因果の糸にたぐり寄せられた、かつてのゼミ生十三名。

恩師の変死から十三年後、十三回忌の夜に、  
運命の再会を果たしたのだった」

しかし…

宇丸 「いないんだわ」

一同 「え？」

宇丸 「十三人いないんだわ」

一同 「え…まじだ」

瀬条 「(数える)にのしろのはのとのじゅうに…わお」

筒美 「比良木くん」

意気揚々と駆けてくる比良木。

一同 「ひーらーきー」

鹿伏 「なにやっつてんだよ」

比良木 「ねてた」

鹿伏 「ふざけろ」

改めまして…

鹿伏 「今宵」

一同 「因果の糸にたぐり寄せられた、かつてのゼミ生十三名。

恩師の変死から十三年後、十三回忌の夜に、  
運命の再会を果たしたのだった」

比良木 「十三回忌は去年だぞ」

一同 「え？」

比良木 「十三回忌は去年やったぞ」

瀬条 「先生が亡くなって十三年目は今年だぞ」

比良木 「満十二年目にやるんだよ。十三回忌法要は」

鳴り響く木魚のリズム。

鹿伏 「待て…ここはどこだ」

瀬条 「読経が鳴り響く恩師の菩提寺…。

しまった、これは13年目の十三回忌法要。

現世に存在しない、幻の空間…」

鹿伏 「しかも13日の金曜日」

瀬条 「男女13人恋物語」

鹿伏 「劇団結成13年目」

瀬条 「忌まわしき13という数字に魅せられた」

宇丸 「青春と友情の物語である」

宇丸、ボコボコに殴られる。

一同 「クソが」

鹿伏 「青春とか友情とか、令和にそんな言葉が通用するかよ」

房毛が語り出す。

房毛 「ねじれてしまった時計の針を少し戻しましょう。

物語は俺たちが出会った大学4年の夏に遡る…」

鹿伏 「させるかあー」

ぶん殴られる房毛。

鹿伏 「おい、客をなめるな。こんな文化レベルの低い島国で、

わざわざ劇場に足を運んでくださる文化レベルの高い皆様だぞ」

一同 「あざーす」

鹿伏 「そんなナレーションでほいほい物語が進んで納得するか。

13年目の十三回忌という、イフ・ワンダーなナウ・ヒア・トゥデイと

戦わないで、それでも芸術家か」

一同 「芸術家…」

鹿伏 「そうだ…俺たち13名は神奈川美術大学・邪ノ目ゼミ。

入学金だけで30万。学費は年間170万。

4年でトータル710万円の学費をぶち込んで

田舎の両親を泣かせながら、芸術とは何かを考え、

見えない敵に立ち向かった戦友だ。こんな時空の歪んだ世界、

俺たちのイメージーションで強制的に矯正してやる。

野郎共、気合を入れろ」

赤根 「…」

気がつけば舞台上は鹿伏と赤根のみ。

鹿伏 「…って、誰もいない。場転だ場転」

戸白 「バテン、というのは何だい？」

鹿伏 「場面転換だよ。シーンが変わったの。ほら、早く。

違うシーンにいくから。赤根、お前も立て早く」

戸白 「劇中人物による、場面転換の指示。シアトリカルだねー」

鹿伏 「なんだよ、文句あんのか」

戸白 「実に、シアトリカルだねー。鹿伏くん」

鹿伏 「ああ：我が恩師、蛇ノ目梯先生」

戸白の姿が亡き恩師・邪ノ目梯となっている。

(以降、場面に応じてゼミ生が恩師を演じる。)

戸白 (邪ノ目)

「1982年に来日公演を果たしたタデウシユ・カントール『死の教室』にどこか似た、ふしだらなモティーフをこの舞台から感じるよ。

『死の教室』のような深い視座を与えてくれることに期待したいね。

さ、私の席はどこかね？」

鹿伏 「先生、あなたのお席はありません」

戸白 (蛇ノ目) 「何故かね？」

鹿伏 「だって、あなたは、十三年前に死んでいます」

泣き叫ぶゼミ生たち。

一同 「うわーん…」

瀬条 「泣け。泣け」

姫益 「先生が…」

一同 「死んでしまったー」

瀬条 「溺れてしまえ悲しみに。恩師を失った悲しみに。

ここは悲しみの。玄界灘」

盾子守 「そんなじゃなかった。大学4年」

冷静に戸惑うゼミ生たち。

宇丸 「マジで…死んだ。殺された？」

黒渦 「蛇ノ目先生が死んでしまった」

一同 「今日のゼミは、どうするどうなる」

瀬条 「俺が仕切ろう」

一同 「せ、せ、瀬条。せ、瀬条」

瀬条 「ゼミの代表という任を先生から拜命しているこの瀬条一。

先生の代わりに指示を出す。皆、まずは先週与えられた課題を提出しろ」

一同 「すーっ (提出)」

姫益 「待って。提出するって一体どこに？」

宇丸 「先生がいなくてどこに提出するんだ」

一同 「先生。先生ー」

亜空間をさまようゼミ生たち。

角下「これは、呪いだ…。」

十三回忌の日程を間違えた俺たちに対する、蛇ノ目先生の呪いなんだ」

その状況を鋭い目つきで見つめる戸白。

戸白「これが先生の呪いなもんか。」

ここはおそらく、俺たち13人の情念が生み出した亜空間。

亡き恩師を懐かしむ、ノスタルチズムのワームホール…」

比良木「意味がわからん」

戸白「意味などいらん。芸術家なら」

一同「芸術家？」

戸白「そうだ俺たちは芸術家、を目指す若者だった」

戸白が語り出す。

戸白

「アスベスト対策のなされていない神奈川美術大学の旧校舎は、足を踏み入れた人間の呼吸器官をズタズタにする。咳と鼻水に耐えながら、充血した目をこすりながら、あの日、学生200名はざらりと廊下に並び審判の時を待っていた。たかが大学の、たかがゼミだ。大袈裟だと人は言うだろう、しかし、このゼミ、蛇ノ目ゼミに入るためにこの大学に入った、そんな人間ばかりずらり」

比良木「僕が学びたいのは、開く、こと」

戸白「俺が学びたいことは、閉じる、こと。」

全く異なる答えを出した俺たち二人がどうして先生に選ばれたのか。それは誰にもわからなかったし、先生亡き今知る術も無い。

しかし誰もが予見した。この蛇ノ目ゼミで、最も憎しみ合う、

いや、最も愛し合う、つまり、最も命を削り合う者がいるとすれば、

おそらく俺たち二人だろう…」

鹿伏「戸白：ナニ急に、主人公っぽくなってんだ？」

戸白「俺は主人公じゃなかったのか…(驚愕)」

房毛「美大で版画なんかやってる野郎が主人公になれるかよ」

戸白「棟方志功に謝れ」

房毛「ごめん」

鹿伏「主人公は誰でもいい。問題は、

横須賀中央銀行横須賀支店に残された先生のポケットマネー4億円」

一同「4億円」

鹿伏「これを使って、先生の名声を後世に残すのだ。俺たち13人で」

瀬条「しかし一体、どうやって？」

房毛「先生の銅像を作るぞ」

鹿伏「つまらん却下」

房毛「作者は俺だ」

鹿伏「なおさら却下。美術館を作る」

一同「びびび、びびび、美術館？」

鹿伏「先生の作品を常設展示する現代美術館だ」

盾子守「4億ほっちゃ作れない」

鹿伏 「4億プラス税金でつくる。すでに高天原市と話はつけた」

房毛 「高天原市？」

瀬条 「蛇ノ目先生の生まれ故郷……」

鹿伏 「高天原市が建設費用20億を肩代わり。

先生の遺産4億円を注ぎ込み完成だ。

しかし、予算をひっぱってくるにはひとつの条件が」

一同 「ゴクリ」

鹿伏 「その美術館に、先生だけでなく、俺たち13人の作品も展示すること」

一同 「俺たち13人……」

今さらながら自己紹介。

瀬条 「集まれゼミ生、大集合。向かって左から……赤根衛門、宇丸完次、角下都

盛、鹿伏太郎、黒渦未唯、志免千八重、瀬条一、盾子守太陽、筒美小梅、

戸白世名、姫益密、比良木安示、房毛流桜。

以上ゼミ生変態13名」

宇丸 「覚えられないよ。急にばーって名前言われても覚えられないよ」

筒美 「じゃあ誰か代表して、

うちらがゼミで出会った時のエピソードをやって頂戴」

宇丸 「よっしゃ、いっちゃオイラがやったるか」

鹿伏 「浜松が生んだ一眼レフの魔術師、宇丸完次。いけー」

大役を任された宇丸、語り出す。横には黒渦未唯が。

宇丸 「東京都庁の目の前で、全裸で小便をまき散らした一ヶ月後、国会議事堂の目の前で、全裸で小便をまき散し、彼女は生きる伝説となった。元ジュニアアイドルだった現役女子高生の奇行に、世間からは熱烈な注目と心ない批判が殺到したが、それでも靖国神社の目の前で、全裸で小便をまき散らし、彼女は完全なる英雄となった。ファンクラブが立ち上がり、トークイベントは即日即完。世田谷区の自宅に脅迫電話をかけた30代の会社員は逮捕された。そんなワイドショーを浜松の田舎でぼんやり見ていた俺だが、まさか大学の同期になるとは思わなかった。どうしてそんなやつが美大に入ってくるんだ。しかもまさかの写真学科。そしてまさかの同じクラス」

黒渦 「私の名前は知ってるでしょう？」

宇丸 「もちろん知っていた。漢字で書ける、黒渦未唯。

が、その態度があまりにもイラついたので「あーちょっと、わっかんないっすねー」と答えた」

黒渦 「かわいそう。私を知らないなんて、かわいそう……」

宇丸 「その時間後、ラブホテルから出て来た俺たち二人をたくさん報道陣が取り囲む。フラッシュバシバシバシヤ浴びながら、俺は悟った。ハメられた。ハメたつもりが、ハメられた」

黒渦 「入学早々！同じクラスの童貞君をいただきます！」

宇丸 「週刊誌にそんな記事が出たことで、実家の姉から怒りの電話がかかってきた。ごめん、姉ちゃん。そうそれは、自己顕示欲、承認欲求のカタマ

リだった彼女の暴力…(逃げ出す)」

黒渦 「どこに行くの」

宇丸 「うるせーな。浜松から上京して来た童貞の心を傷つけやがって。お前のせいで俺の実家との関係は最悪だ。あっちに行け」

黒渦 「私たち…付き合ってるんでしょ？」

宇丸 「え？」

黒渦 「付き合ってるんだよね？私たち」

宇丸 「え？この質問は怖いよ。どっち？どっち？どっちが安全？これ付き合っていないって言ったらどうなるの？」

黒渦 「私が全裸になるのはね、私がおしっこをするのはね。私の写真の価値を上げるためよ。十代で極限まで高まった私の女としての価値を二十代直前でぶち壊し、後に残った私の搾りかす。一枚の写真を見てもらうのよ」

瀬条 「待って待って。そりゃ、お前らふたりが1年の時、写真学科で出会った話だろ。俺らは大学4年のゼミで出会った話をしるって言ったんだ」

ゼミ生たちから、罵詈雑言。そこに現れる蛇ノ目(盾子守)。

盾子守(蛇ノ目) 「いや、正直よかったと思う」

一同 「先生」

盾子守(蛇ノ目) 「大学で若き男女が出会う。大衆はある種のティピカルストーリーを求めている。ところで黒渦くん、公衆の面前で裸体を晒す…果たしてそこに、アートはあるのかい？」

黒渦 「ありまあす」

盾子守(蛇ノ目) 「君は、生き様そのものがアーテだね」

黒渦 「じゅわー(歓喜の放尿)」

瀬条 「…先生、そろそろどこかに行ってください」

盾子守 「それはつまり？」

瀬条 「あなたは十三年前に死んでいます」

泣き出すゼミ生13名。そこは先生の葬儀。

鹿伏 「並べ、まとまれ、一列に。固まって行くぞ、お葬式」

房毛 「いやだね、俺はアーティスト。右向け右、前へ習えなんて…」

鹿伏 「じゃあ、置いて行くぞ」

房毛 「許してほしい」

鹿伏 「どうぞこちらに」(記帳を…)「

赤根 「…(色鉛筆で塗ろうとする)」

鹿伏 「って言ってるそばから色鉛筆。やめろ、赤根、これはぬり絵じゃない」

宇丸 「存在そのものがアートだった先生の葬儀…」

もはや最高のアートフェス(写真を撮る)

鹿伏 「宇丸、やたらめったら写真を撮るな。いくぞ。れつたら、お焼香…って、姫益どうした」

姫益 「お焼香なんて、いたしません。」

私は本当の神と出会い、本当の真理を知っています。

「ご遺体に祈りを捧げるなど、何の意味もない行為」

鹿伏 「いいから、やれよ。後がつかえてる」

姫益 「主よ、あなたのお導きを。アーメン」

鹿伏 「仏前で十字架きりやがったな。手を合わせる」

姫益 「アーメン」

鹿伏 「角下、木工用ボンドもってこい。こいつの両手をくっつけてやる」

角下 「うえーい（ボンドで姫益の両手を合掌の形に固定する）」

姫益 「父なる神、主なるイエス、精霊…」

鹿伏 「おい、黒渦…？ まさか、こんな場所で、小便なんかしないよな」

黒渦 「よくわかったな鹿伏。私はするぞ」

鹿伏 「やめてー」

黒渦 「恩師の葬儀で放尿する私」

宇丸 「そして彼女は伝説となった」

黒渦 「時はきた。それだけだ。じゅわー（哀悼の放尿）」

焼香の列から離れた瀬条。

鹿伏 「瀬条、まともなのはお前だけだ」

瀬条 「貧乏苦学生の俺だが、先生のために金をかき集めてきた。

（懐から）「ご祝儀だ」

鹿伏 「香典な。何でご祝儀なんだよ。

そして、インパクトも弱い。おしっこ後に「ご祝儀は弱い」

合掌する13名。そのポーズで固まる。

戸白 「これが俺の卒業制作。タイトルは、『御披楽喜』」

比良木 「命を削った木版画。あの日の俺たち13名」

戸白 「まさに青春、思い出の一枚」

比良木 「恩師の葬儀に集まった、ゼミ生変態13名」

現れた恩師・蛇ノ目（筒美）。

筒美（蛇ノ目）「戸白くん。

いつまで十三年前の木版画の中に閉じ籠っているのかね」

戸白 「先生」

筒美（蛇ノ目）「今日は私の十三回忌法要だろう」

戸白 「そうだ、幻の十三回忌…」

筒美（蛇ノ目）「もしこの幻の十三回忌が、

空間におけるインスタレーションだとすれば、今こそ求められるのは…

エロチシズム」

一同「エロチシズム？」

鹿伏 「わかりました。よし、黒渦。

お前が宇丸のちんちんペロペロした話をやれ」

黒渦 「はあ？お前がゼミ合宿で筒美とモチモチした話でいいだろ」

鹿伏 「ペロペロやれよ」

黒渦 「もちもちやれよ」

志免 「やめな。エロチシズムと聞いた日にや、心ムラムラ股キュンキュン。

この志免千八重に任せなさい。そう、あれは六月。

雨上がりの江ノ島：横田基地の米兵たちに…」

筒美 (蛇ノ目) 「下がれ」

志免 「はい」

筒美 (蛇ノ目) 「姫益くんの妊娠にも触れたらどうだ」

大きなお腹を抱えた姫益。

姫益 「妊娠したわ」

一同 「妊娠？」

姫益 「神の子よ」

一同 「神の子？」

姫益 「神が御子を世につかわされたのは、世を裁くためではなく、御子によつて、この世が救われるためである」

鹿伏 「流産パンチ(腹を殴った)」

筒美 「なにやってんの？」

鹿伏 「子供なんかいないよ。処女だぜ、処女。妊娠とかしない」

姫益 「しております。大天使様が教えてくださいました」

鹿伏 「流産パンチ」

姫益 「主よ。この者の罪を許したまえ」

鹿伏 「うるせえ処女。右の頬をバーン(張り手)」

姫益 「左の頬をグリーン(笑顔)」

鹿伏 「たまんねえな」

瀬条 「エル・グレコ『受胎告知』を見たその日から姫益密の想像妊娠は止まらない」

姫益 「私は現代のマリアとして、世の人々を正しい道へと誘うのです」

瀬条 「なんで美大なんか来たよ。」

姫益 「良い質問です。聖書にこんな文句があります」

瀬条 「いないいない、聞いてない」

鹿伏 「まあ、頭はおかしいが、貞操をしっかりと守ってらっしゃることは評価した。いな。どっかの淫乱よりはましだ」

志免 「聞き捨てならないね。こんな素敵なゼミに淫乱なんているわけないですよ」

瀬条 「お前だよ」

宇丸 「淫乱なの？」

瀬条 「淫乱なの」

志免 「淫乱じゃないよ」

瀬条 「日本画専攻の男たち、全員とやったんだろ」

一同 「え？」

宇丸 「やったって、何を？」

瀬条 「ナニをだよ」

宇丸 「ナニがナニしてナニヌネノ」

志免 「葛飾北斎…(セクシーポーズ)」

瀬条 「夕焼けに染まるオイラの赤富士…」

以上、日本画専攻からの唯一のゼミ生、志免千八重」

志免「あれ？日本画って、私だけかい。学部と学科を改めてドン」

ゼミ生たちの学科紹介。

志免「美術学部絵画学科日本画専攻」

鹿伏・瀬条・筒美「美術学部絵画学科油画専攻」

赤根「……」

角下・房毛「美術学部工芸学科彫刻専攻」

宇丸・黒渦「美術学部映像学科写真専攻」

盾子守・姫益「美術学部情報デザイン学科」

もじもじする比良木。

盾子守「比良木くん、学科は？」

比良木「美術学部漫画学科漫画専攻」

一同「うーわー（軽蔑）」

宇丸（蛇ノ目）「やり直したまえ」

一同「先生」

宇丸（蛇ノ目）「今のリアクション……二兆円産業と呼ばれる日本のアニメ・マン

ガ業界に対する批判と受け取られかねん」

盾子守「比良木くん、学科は？」

比良木「美術学部漫画学科漫画専攻」

一同「いいわね。いいわね」

比良木「デビューしたらさ、お前らのこと、漫画にするからね」

瀬条「え、俺たち、漫画になるの!？」

比良木「学生時代の楽しい思い出エッセイ漫画、タイトルは『おきらくおひら

きくん』」

瀬条「お前が主人公だよ」

鹿伏「お前がいなけりゃ、俺たちの学生時代は、まさに上質なヌーベルヴァ

ーグ」

宇丸「俺らが構えたカメラのレンズ。そこに残ったセンサーダスト」

戸白が語り出す。

戸白「開くことを学びたいあいつは漫画学科だが、閉じることを学びたい俺は美術学部工芸学科版画専攻。何もかもを閉じたい。閉じる瞬間こそ快感。閉じたい。閉じてしまいたい。」

灰色の工場が建ち並ぶ東大阪工業地帯。シャッターが下りていく様に快感を覚えた。昼間、あんなにうなり声をあげていた機械たちが、シャッターがしゃんで死の町に。窓を閉めるのも好きだった。耳障りな音、鼻がもげそうな臭い、それら窓を閉めると、すっとなくなる。どんどん閉じて行きたい。自分の感覚を、閉じて行きたい。首を吊った、違うんだなあ。きゅってしまる瞬間、瞳孔がひらくのかな？感覚がひらくのかな？まぶしくって、うるさくって、あ、これ違う違う。タンマタンマ。凍死も考えた。布団圧縮袋に入ること。違うんだなあ。綺麗に閉じたい。誰か密閉して欲しい。僕らの感性をそれができるのが芸術。その中でも

特に木版画。世界の一瞬を、永遠に閉じ込めてしまえる唯一のツール」

版画を刷ろうとしている戸白に比良木が一言。

比良木「版画なんて、卒業したらどうやって喰ってくんのだ」

戸白「大切なのは卒業後じゃない。卒業制作だ！」

そこは卒業制作展。

瀬条「卒業制作展で最優秀賞をもらい、作品が大学に買い上げられる。それは事実上の首席卒業を意味した」

鹿伏の油絵を眺めるゼミ生たち。

房毛「鹿伏：いや、お前の絵かよ」

鹿伏「タイトルは『恩師』」

房毛「どうしてこんな絵を大学が買う？」

盾子守「買うわけ無いでしょ」

房毛「買ってるじゃん」

盾子守「買わせたんじゃよ」

房毛「買わせたんですか？」

鹿伏「買わせた、あのな。少子化と貧困化で大学経営は火の車。

広告塔だった蛇ノ目梯を失った大学は、次なるスターを求めている」

房毛「それがお前なのか」

鹿伏「大学は、蛇ノ目梯の最後の弟子として、俺を世に売り出したがってる。

蛇ノ目先生のDNAを受け継いでいる俺はそれに乗った」

房毛「先生のおこぼれにあずかるコバンザメ」

鹿伏「例えが不適切だ。俺は先生のポストを丸ごと乗っ取る冬虫夏草(ポーズ)」

房毛「ああっ、黄金比」

戸白の版画を眺めるゼミ生たち。

戸白「これが俺の卒業制作。タイトルは、『御披楽喜』」

比良木「命を削った木版画。あの日の俺たち13名」

戸白「まさに青春、思い出の一枚」

比良木「恩師の葬儀に集まったゼミ生変態13名」

鹿伏「まさか、十三回忌で再会できるとはな。今宵」

一同「因果の糸にたぐり寄せられた、かつてのゼミ生十三名。

恩師の変死から十三年後、十三回忌の夜に、

運命の再会を果たしたのだった」

比良木「十三回忌は去年だぞ」

一同「えっ」

比良木「十三回忌は去年やったぞ」

鹿伏「待て。ここはどこだ」

瀬条「読経が鳴り響く恩師の菩提寺。」

しまった、これは13年目の十三回忌法要。  
現世に存在しない、幻の空間」

鹿伏 「しかも13日の金曜日」

瀬条 「男女13人恋物語。」

鹿伏 「劇団結成13年目。」

瀬条 「忌まわしき13という数字に魅せられた」

宇丸 「○○○○(低俗なキャッチコピー)」

瀬条 (邪ノ目) 「宇丸くん…今のキャッチコピーはどういうことだね」

宇丸 「あ、いや、その…」

しばし、蛇ノ目(瀬条)による説教。

瀬条「いいか、君たちは生まれながらにアーティスト。個性と個性の殺し合い」

蛇ノ目(瀬条)が房毛をぶん殴る。

房毛 「俺の右目は網膜剥離で視力はほとんどナッシング。

先生からの暴力のせいさ。

先生は、その右手で、左手で、両の手でとにかく俺たちをボッコボコ。一番のターゲットは俺。ともかくにも殴られた。言動、行動、作品、思想、なんくせつけられ、ともかくにも殴られた。そう、俺は先生のお気に入りだったんだ。ゼミは毎週木曜5限。先週は後頭部にゲンコツを5発は食らった。今週はせめて違う部分を殴られるように、あえて、おしりを差し出した。そんな俺の奴隷根性を見透かした先生は、あえてのあえて、後頭部を再び殴る。素晴らしいです、先生。先生の鉄拳こそ芸術。ゼミは毎週木曜5限。先生は、かならず俺を殴り、かならず俺にお詫びのディナー。忘れもしない特大うな重、税別4800円。箸を延ばす前に山椒パツパと振りかけた俺を先生は横からストレート」

鹿伏 (蛇ノ目) 「この店の粉山椒は海外から輸入した安物さ。」

房毛 「高級なうなぎには相応しくない」

房毛 「そう言っ先生は、カバンから京都の契約農家から取り寄せたグラム2

00円の山椒をふりかけた」

鹿伏 (蛇ノ目) 「君たちが最後の弟子となるかもしれない」

房毛 「うなぎを食べながら先生は言った」

鹿伏 (蛇ノ目) 「君たちが最後の弟子となるかもしれない」

房毛 「まさか先生、大学をやめるのですか」

鹿伏 (蛇ノ目) 「人生をやめるのです」

房毛 「自殺ですか？心中ですか？」

鹿伏 (蛇ノ目) 「殺人だ」

房毛 「殺人？」

鹿伏 (蛇ノ目) 「今の私は、私の名声を後世にできるだけ長く残すこと、  
「長死に」にしか興味がない。あとのことは頼んだよ。  
4億円でなんとかしてくれ」

房毛の話が終わり。

鹿伏 「4億円の話…お前も聞いていたのか」  
房毛 「そりゃ、先生のお気に入りだったからな」

角下 「うなぎ食ってただけだろ」

房毛 「先生の死後、4億円の在処を探しまわっていたが、

お前が隠していたとはな」

鹿伏 「隠していたんじゃない。守ってたんだ」

房毛 「ものは言いようだ」

鹿伏 「もう逃げも隠れもしない。さあ、作ってくれるよな。

先生にその才能を見出

された13名。今は無き恩師へのご恩返しだ」

比良木 (蛇ノ目) 「待ちたまえ」

瀬条 「先生」

比良木 (蛇ノ目) 「私が死んだのは殺人によるものか」

瀬条 「そうです。先生は殺されたんです」

比良木 (蛇ノ目) 「殺された…いつ誰に、どうやって。」

大衆にはそのあたりの説明が必要ではないのかね」

瀬条 「実は、そのエピソード、劇団の前回公演『美少年』でやっているの、

割愛させていただきます」

比良木 (蛇ノ目) 「いや、しかし、前回公演を見ていない大衆にとっては、

何がなにやら、ちんぷんかんぷん」

瀬条 「大丈夫です。DVDを買っていただければ」

比良木 (蛇ノ目) 「ほう、それは私も買うのかね」

瀬条 「そうですね、先生と言えど、ちょっとこれは、お代金いただきます」

比良木 (蛇ノ目) 「房毛くん、私のカバンから財布を」

房毛 「はい」

比良木 (蛇ノ目) 「劇中人物が自らの運命を知るためにDVDを購入する。

実に、シアトリカルだねー」

にこやかに変える蛇ノ目 (比良木) を眺め、角下が語る。

角下 「先生の目は節穴だった。だって名字が蛇ノ目だ、蛇だ。蛇の目はすごく

悪いんだ。ただし、蛇にはピット器官と呼ばれる特別な器官があって。

恒温動物から放射される赤外線を感知できるんだって。テレビでアイバ

くんも言っていました。でも目が悪いんですよ。いくら先生がピット器官

を働かせたってね、変温動物みたいな俺の本性は暴けなかった。志なん

てない。俺はノリで美大に入ったんだ」

瀬条 「それでも、選ばれたってことは、やがて芸術家として大成することを先

生に託されたんだ」

角下 「こんな俺の作品が、アートになりますかね。無理だよな。適当な広告代

理店にリクルート」

瀬条 「わかってる。まずは広告代理店に就職し、そこでデザインのノウハウを

学び、ポップカルチャーをがんばるんだよね。お前は日本の、アンディ・

ウォーホルになれる」

角下 「なってるや。アンディ・ウォーホル。…って誰だよ。

メタリカ？メタリカのメンバー？オアシス？」

鹿伏 「お前みたいな野郎がどうして入社できたかわかってんのか？蛇ノ目ゼミだからだよ。蛇ノ目ゼミの出身者なら、アート業界に顔が利く、そう思われての人事課の判断だ。わかったか、ドブネズミ」

角下 「ブッヒブヒ」

鹿伏 「ブッヒブヒは豚だ。今俺はドブネズミって言ったんだ、やり直せ」  
角下 「チューチュー」

気を取り直して、盾子守。

盾子守 「ドブネズミの意見は放っておくけど、たしかに、先生は赤根衛門の才能を見出した」

宇丸 「おっと、こつから知的障害者の身の上話だ。  
気に入らない奴はシャットダウン、プリーズ」

盾子守による赤根の話。

盾子守 「食べる、歯を磨く、服を着る。人間らしいことが何もできない彼が、唯一、できたのがぬり絵。ぬり絵以外のコミュニケーションができない。ぬり絵以外に何を考えているのか。彼の心の門は鎖されたままなのです」

宇丸 「同情すんなよ。同情すんな。」

こいつ（赤根）が何食って生活してるか知ってるか？

寿司に、焼き肉に、懐石料理。赤根の実家は岐阜で四代続く運送会社。オートロックのマンションに住み、家にはお手伝いの若い女が3人

一同 「エッチ…」

宇丸 「なんかの手違いで妊娠なんかしちゃいけねえから、こいつはこつそりパイプカット。人権侵害ヒアウイゴ」

「それでも、先生に選ばれたってことは、やがて芸術家として大成することを期待されたんだ。目指せ、裸の大将」

盾子守 「裸の大将をこえるアーティストになった」

一同 「なに？」

盾子守 「赤根くんがぬった美少女戦士のぬり絵がニューヨークで9000ドルで落札」

一同 「なに？」

盾子守 「まき起こる論争。ぬり絵は現代アート足りうるか。男性用の小便器に『泉』と書いたマルセル・デュシャンの問いかけに、新たな問いがなされたわけだ」

宇丸 「お前がウマいこと言って売りつけたんだな？」

盾子守 「ニューヨークはアートの関ヶ原」

瀬条 「盾子守、大学るとき、こんなやつだった」

盾子守 「あなたの夢を諦めないで」

瀬条 「ああ、岡村孝子。才能を認められた俺は素直にフォーリンラヴ。  
なのに、戸白と付き合っているのかよ」

戸白と腕を組む盾子守。

盾子守 「付き合っていないよ。ルームシェア」

瀬条 「年頃の男女。ひとつ屋根の下」

盾子守 「付き合っていないよ。ルームシェア」

瀬条 「親父。東京はおそろしかとこばい」

盾子守 「九州？」

瀬条 「宮崎」

盾子守 「マンゴー」

瀬条 「モツ。さはさりながら俺も恋人ってわけじゃない。

口を挟めぬもどかしさ」

角下 「告白しちゃえばいいじゃん

瀬条 「応援ありがとう、脇役。付き合ってくれ」

盾子守 「ごめんなさい」

瀬条 「瞬殺」

角下 「他人の不幸は抹茶味」

瀬条 「抹茶だけに、宇治宇治してられない。いや、帰れー」

盾子守 「誰かの自分になるのは御免。誰をも自分のものになりたい。

誰も彼もの心の隙間に、そっと忍びよる盾子守」

瀬条 「キュレーターになるのが夢だよ」

盾子守 「面白おかしいアート業界。

表から裏から転がすために、若い才能青田買い。

不安定極まる青春のハートにコミット」

戸白 「コミットするのはハートで十分。どうして俺とルームシェア？」

盾子守 「調べはついてるモンマルトル。あなたの情緒、不安定。

中学時代から繰り返し続ける自殺未遂。

またやる気でしょ。今度の伊豆でのゼミ合宿。

そう再度、シーサイドでスーサイド」

戸白 「死なないよ。俺が求めるのは死ではない。

俺が求めるのは「長死に」だ。

ああ、つまらんつまらん造語」

黒渦（蛇ノ目）「長くというのは、いつまでだ」

戸白 「できる限り、たとえば千年。千年じゃ足りないか」

黒渦（蛇ノ目）「戸白くん。どうして、永遠と言わない」

戸白 「あ、蛇ノ目先生」

黒渦（蛇ノ目）「安室奈美恵に浜崎あゆみ。ノストラダムスが迫り来る、胸のド

キドキ世紀末。90年代後半には「永遠」という言葉が盛んに歌われた

ジェイポップ。二十一世紀となり我々は永遠という言葉を失った。君は、

永遠に、死に続けることができるか？」

戸白 「永遠に…死に続ける。それはとんでもない離れ業。

肉体が減びようとも、誰かの、思い出や思い入れや思い込みとなること。

それには一体どうしたら…」

瀬条 「戸白。お前は版画だろ？」

戸白 「そうだ、俺は木版画。…はい？」

瀬条 「俺は油絵、角下は彫刻。鹿伏や黒渦、いまや奇跡のぬり絵アーティスト

として活躍している赤根とかは、とにかく好きなもんを展示しろ」

戸白「ごめん、なんの話だ」

瀬条「高天原美術館に展示する俺たち13人の作品だよ。ねー」

鹿伏「そー」

盾子守「ねえ、筒美も出すのよね」

筒美「当たり前じゃない」

盾子守「当たり前じゃないやつを」

筒美「あたり」

盾子守「悲しいよ。この中で、一番才能があったのは、あなただった。

あなたのハートにコミットできてればよかったのに…。

ここからは、筒美小梅さんのエピソードです」

絵を描いている筒美小梅。それを見る盾子守。

筒美「肩を触るな、レズ女。こっちを見んな、レズ女」

盾子守「筒美。すごいよ。こんな絵かけない。神様からの贈り物だね」

筒美「こんな贈り物、天国に送り返してやりたい」

盾子守「あなたの作品を私に売らせて」

筒美「うっぜー。神様、うっぜー。私、絵の才能もあるのかよ。

デッサン力、色彩感覚、空間構成のセンス。

いらねえよ、こんな才能。世界を見通す、この目が憎い」

鹿伏「自らの才能に苦しむ筒美小梅」

筒美「美大に入ったのは己の才能の無さを思い知るため」

鹿伏「しかし、アートの才能は」

筒美「花咲き開くラフレシア」

見つめ合う筒美と鹿伏。

鹿伏「目の前に立ちはだかる壁。小さな巨人」

筒美「鼻クソほどの価値も無い。俗悪な凡人」

鹿伏「天才っぷりを憎んだ俺は」

筒美「凡才っぷりに憧れた私」

鹿伏「付き合ってください」

筒美「恋は盲目。座頭市」

鹿伏「お前の鋭い感性を」

筒美「ときめく恋の喜びで」

鹿伏「鈍らせてやる」

筒美「お願い私を、鈍感にさせて」

鹿伏・筒美「あー（抱きしめ合う）」

鹿伏「…今ではただの、ただの女だ」

筒美「ウーマン…」

鹿伏「これでもう、お前は、芸術を考えなくていい」

筒美「ただの、ただの女ね」

鹿伏「ウーマン」

歓喜のゼミ生たち。

一同「せーの、鹿伏くん、筒美さん、ご結婚おめでとうございます。  
僕たちは、せーの、神奈川美術大学の蛇ノ目ゼミのメンバーです」

立ち去るゼミ生たち。

鹿伏 「どうして来なかったんだ」

盾子守 「誰が行くかよ」

宇丸 「誰が行くかよ」

瀬条 「いや、これは行かないとマズいだろ」

宇丸 「何がマズいんだ」

瀬条 「鹿伏、筒美、ゼミの同期のウエディング」

宇丸 「もうゼミはない。卒業してからはや幾年。それぞれの道を歩き出した、

俺たちししゃかりきアベンジャーズ。

リーマン（角下）、教師（志免）、家事手伝い（姫益）…」

房毛 「俺は孤高のアーティスト」

黒渦 「黙れ生活保護」

房毛 「ぶあ…」

宇丸 「瀬条。お前だって、夢破れて、今はただの不動産屋だろ？」

鹿伏 「そう、俺は不動産屋さん。キューン…。鹿伏の結婚式になかったのは、

耐えられなかったからだよ。なあなあ、なあ。卒業制作につまんない抽

象画を提出して以来、どうして俺が絵を描いていないかわかるか？惚れ

ちまったからだよ、お前の絵に。お前が親父さんから受け継いだという

イーゼルを立てる姿、俺は体を熱くしていた。次はどんな新作を作るん

だろうと、ワクテカ。

おいおいおい、お前は、このモチーフに、何を見る。何を描く？」

鹿伏 「見たまんま描くだけだ」

瀬条 「お前はそう言う。いつもそう言う。しかし違うんだ。見たまんま…普通

の人間はこれができない。描いただけ…普通の人間はこれができない。

キャンバスのどこかに、自分の主観、自分の痕跡を必ず残そうする。い

いや、それを残すために俺たちは、絵の具のチューブを引き裂くんだ。お

前に出会って俺は、いかに自分が醜い自我にまみれた俗悪な人間である

かを思い知った。絵は描けないと筆を折り、今では不動産会社で事故物

件の販売に汗を流してる。営業成績は西東京一だぜ。それなのに、お前

は、芸術家になったお前は、絵を描かない。大学に媚び売りゴマすり芸

術家を名乗り、シンポジウムに出席しては偉そうなことをだらだら語る

美大の准教授。出世のたびに「ご丁寧」に、同期にタラバガニ送りつけるイ

ケイケイヤミ。信じられないよ。俺の未来を返してくれよ…ってことで、

行きませんでした」

鹿伏 「畜生っ。一方的に長台詞をぶつけやがって…」

食事を貪る比良木と角下。

比良木 「角下。ゼミ生、俺たち以外誰も来ないみたいだ。

角下 「食べログ」

比良木 「おめでどう。すてきな花嫁姿」

鹿伏 「お前は何でいるんだ？」  
比良木 「描いてやったぜウエルカムボード（取り出す）」  
鹿伏 「下手以下！」  
比良木 「ヘタイカ？」  
鹿伏 「下手糞にもなってるねえ、なんだこれ？絵か？」  
筒美 「紙に絵の具が乗っかってるから絵なんだろうが、おいおい」  
鹿伏 「私は、上手だと思っただけだ。よく描けてる」  
筒美 「目潰してやろうか。ごめん、今のは冗談だ」  
鹿伏 「冗談になってないから、ちゃんと謝って」  
比良木 「ごめん」  
鹿伏 「じゃあ、これ置いておくれ。ウエルカムボード」  
鹿伏 「やめろやめろ。俺の結婚式が、美大臭くなる」  
比良木 「美大臭くっていいじゃん」

ふらりと現れた戸白。

戸白 「比良木、何やってる？」  
比良木 「肉喰う客」  
戸白 「鹿伏の結婚式、お前は呼ばれてなかったはずだ」  
比良木 「え、俺。呼ばれてなかったの？」  
筒美 「呼んでなかったの？」  
鹿伏 「漫画家なんてゼミの面汚し。呼ぶわけない」  
戸白 「帰れ。全体のバランスを狂わせるな」  
比良木 「13年目の十三回忌だぞ。いまさらバランスもへったくれもあるかよ」  
戸白 「矛盾。無秩序。不合理。不整合…」  
比良木 「わかったよ。帰ろう。すみません。これ、折り詰めにしてください」

乱入してくる黒渦と宇丸。

黒渦 「ハッピーウェディングー。  
よし、鹿伏の控え室にクソばら巻いて撤収だ」  
鹿伏 「カンチヨー？」  
宇丸 「つまり彼女は、カンチヨーと大便で、感情を代弁しているのだ」  
鹿伏 「やめてー」  
黒渦 「…くそつ。今日は私の大腸の具合がよくない。命拾いしたな、鹿伏。  
今日はおしっただけで勘弁してやる、しー（祝福の放尿）」  
宇丸 「鹿伏の結婚式に乱入し全裸で小便をまき散らし、彼女はやっぱり伝説と  
なった」  
筒美 「あんたたち、まだ付き合ってたんだ…」  
宇丸 「付き合っていないよ。雇用主と従業員。従業員と雇用主」  
黒渦 「恋人でしょ？」  
宇丸 「よく言うぜ。どの顔が言った。この顔か、カワイイ。てめえがこしらえ  
たトンでもねえ額の借金を押っ被せられて、俺は死ぬまでお前の奴隷だ」  
黒渦 「恋人でしょ？」  
宇丸 「…恋人だ」

得意気な黒渦。

黒渦 「そんな私、先生が死んで十三年目の今でも、日本のアイドル芸術家。

先生の遺産と高天原市の予算でびびび美術館を作る？

そこに作品を展示する？はい、賛成できません」

鹿伏 「どうして賛成できない？」

黒渦 「他のやつらは騙せても、この黒渦美唯は騙せねえ。

高天原市は人口4万のクソ田舎。20億なんて予算もってるわけがねえ。

その金はきつと県のもの。そしてそれは、須佐之男原発の交付金だろ？」

一同 「げげげ…原発…」

黒渦 「電力が絡んだ金で、アートは作れねえなあ」

鹿伏 「電力が絡んだ金でアートを作れ。幾ら欲しい？」

黒渦 「いくらつまれても、それは、被災地の子供たちとの約束があるから」

鹿伏 「じゃあ、ノーギャラでどうだ」

黒渦 「どんなチャリティだよ、馬鹿か？」

鹿伏 「俺はよ、そんなくだらん議論にや興味はねえ。

美術館がひとつできるんなら、原発がいくらできたって構わない」

黒渦 「あらー、被災地の子供達が聞いたら泣くわー」

鹿伏 「泣け」

房毛 「待てい。双方の言い分、よくわかった。

出口の見えぬこの議論、房毛流桜が持ち帰らせてもらおう」

黒渦 「黙れ、生活保護」

房毛 「ぶあ…」

鹿伏 「この島国が、原発だらけになっても、

ひとつ素晴らしい美術館ができればそれで満足だ」

黒渦 「そんな美術館、誰が来る」

鹿伏 「素晴らしい作品があれば来るだろう。

もしチエルノブイリでポッティチェリの遺作が見つかったら、

俺はすぐにでも飛んで行くね」

黒渦 「ロシアで見つかるわけねーだろ、ポッティチェリが」

鹿伏 「例えばの話だ」

比良木 「それにしちやあ飛躍しすぎている。

南相馬から横山大観ぐらいの距離感でいこうぜ」

鹿伏 「入ってくるな」

比良木 「入ってきちゃった」

角下 「そこまでだ。言いたい放題言いやがって…この角下都盛の話を聞け」

角下の話。

角下 「俺は…広告代理店に勤めている。安定した収入がある。娘は私立。

マンションも買った。嫁かわいい。

だが、金がもらえるならなんでもやるぜ（最低）」

鹿伏 「ありがとう、角下。心がやすらぐぜ、お前みたいな虫けらを見ると」

角下 「チューチュー」

鹿伏 「チューチューはネズミだろ。」

俺はいま虫けらって言ったんだ。やり直せ。虫けら」  
角下「オーケラ、オーケラ」

鹿伏「もれなく13人全員の参加が条件だ。誰も抜けるなよ。」

これは蛇ノ目梯先生の：」

黒渦「先生の名前で電力の金を掴ませる気だな？」

鹿伏「4億円だって、俺が独り占めできたんだぞ。俺のやさしさ感じ取れ」

黒渦「上から目線にもううんざりだ。本音を語れや、サン、二、イチ」

鹿伏「俺の夢だ」

一同「夢」

鹿伏「先生のお名前を残すため、大学の同期と美術館をつくる。これは俺の夢だった。そりや、俺一人でやれたらよかったは、わかってるんだ。俺はお前らより、才能がない」

筒美「太郎ちゃん：」

鹿伏「だから俺は大学に己の生きる道を賭けた。いつか、みんなと、また一緒に芸術ができるように。また、芸術やろう。頼む、この通りだ」

鹿伏、頭を下げる。

宇丸「プライドの塊だったあの鹿伏太郎が：頭を下げるとは：」

黒渦「お、男が頭下げるんじゃねえ。」

頭下げられたら、おしっこするタイミングわかんねえだろ。

おしっこ引っ掛けられるまで、しゃきっとしてろや：」

一同、諸手を挙げて、鹿伏への賛同の意を示す。

鹿伏（蛇ノ目）「はいはい。いやー、ありがとう」

瀬条「先生」

鹿伏（蛇ノ目）「君たちの友情に期待して、本当によかった」

瀬条「先生の頼みとあっては、やってみせます命にかえて」

鹿伏（蛇ノ目）「がんばりたまえ、命を削れ。死ぬ気で行け。ってか死ね」

瀬条「先生。あなたはもう」

鹿伏（蛇ノ目）「わかってる、死んでるのだよな。」

13年前に。よくよく理解している。シアトリカルだねー」

瀬条「先生のお言葉もあった。さあ、作ろうじゃないか、美術館。」

鹿伏「今宵」

一同「因果の糸にたぐり寄せられた、かつてのゼミ生十三名。」

恩師の変死から十三年後、十三回忌の夜に、

運命の再会を果たしたのだった。

恩師の遺産4億円。国からの税金20億。

で、高天原市現代美術館を完成させたのだった」

美術館が完成した。狂喜乱舞するゼミ生たち。

瀬条

「タイムトラベルは、ああ楽し、

学生時代の楽しい思い出、ぼんぼん詰め込むミュージアム」

苦悩する戸白。

戸白 「なんだ、この茶番は…。」

奇妙奇天烈、奇々怪々、幻の十三年目の十三回忌  
法要に、こんな生ヌルい結末が待っていたとは」

比良木 「何が気に入らん？」

戸白 「何もかも」

比良木 「何もかも、うまく行ってる。」

努力・友情・勝利の三本柱で順風満帆、面舵いっぱい」

戸白 「イマジネーションの大海で、氷山を見失うタイタニックの胸騒ぎ…」

比良木 「流石だよ戸白…お前は、他のヤツらとは違う。」

生命の在り方について沈黙考するお前は、

この徒な亜空間の正体がおぼろげながらわかってきたな」

戸白 「しまった。早く閉じ込めない」と

比良木 「閉じ込めるだど？」

戸白 「流れ移ろう刹那の友垣。俺の木版画で永遠に…」

仲間たちの姿を木版画にしようとする戸白。

その手を比良木のGペンが止めた。

比良木 「…木版画なんて所詮ペラいち。

そんなスピードで毎週16ページを描き捨  
てる俺のペンは止められない」

戸白 「比良木、てめえ」

比良木 「漫画は記号の集合体。印象と記憶のフラッシュバック」

戸白 「やはり、そうか、これは。」

大学時代の楽しい思い出エッセイ漫画『おぎらくおひらきくん』

ゼミ生たちのフォルムが漫画のように変化する。

比良木 「とっくの昔に連載開始」

戸白 「いつのまにやら夢幻の住民」

比良木 「バトルにギャグにラッキースケベ、

コナンのパクリ、ワンピースの猿真似、シティハンターの二番煎じ。  
金になるんならどんな駄作も、手当たり次第に描いてきた。

その傍らでやりたい放題、青春時代の総清算」

戸白 「それが俺たち13人か」

比良木 「それがお前ら13人だ」

戸白 「ゼミに入ったのも、はなっから漫画のネタ集め」

比良木 「俺たちの閉じられた青春時代。あけっぴろげに世間に開く」

戸白 「それにしちゃあ、比良木。キャラクターの顔が延びている」

比良木 「顔が延びてるだあ？」

戸白 「たくさん描き過ぎ惰性の仕事。連載が長期化しているな。」

比良木 「連載開始からもう13年。」

学生時代にのエピソードは、とっくに底を尽きている」

戸白 「終わらないゼミ合宿：死なない恩師：完成しない卒業制作：」  
比良木 「青春時代の、書き足し、焼き増し、練り直し。それももう限界だ。

新たなエピソードを俺は先生の十三回忌法要に求めた。

お前らなら、先生を妄信的に愛したお前らなら、  
またここで会えると思ったんだ。それがどうだ。

あの日、読経が鳴り響く恩師の菩提寺に、お前らは誰も来なかった。  
間違えたんだな日程を。満十二年目にやるんだよ」

瀬条 「…それでいい。それでいいんだ。比良木。

芸術家じゃねえお前は、現実から目を背け続けろ」

比良木 「なんだと」

戸白 「アシスタント5人雇って月に締切6本抱える奴隷漫画家のお前には  
俺たちが十三回忌に行かなかった理由なんかわかるまい。

思い出すのが辛過ぎて、集まりたくなかったんだ」

比良木 「どうということだ」

戸白 「俺たちをただ日程を間違えた。おとぼけちゃんってことにしろい！」

比良木 「どうということだ」

角下（蛇ノ目）「ところで、ひとつ疑問なのだが」

戸白 「先生、向こうへ行ってください」

角下（蛇ノ目）「ところで、ひとつ疑問なのだが」

戸白 「先生、向こうへ行ってください」

角下（蛇ノ目）「ところで、ひとつ疑問なのだが」

戸白 「あなたは、」

一同 「十三年前に死んでいる」

角下（蛇ノ目）「房毛くんは去年死んだはず。

君たちの中で、そのあたり、どう処理しているんだ」

沈黙するゼミ生たち。房毛、たまらず、逃げ出そうとするが、

瀬条 「…落ち着け。俺たちは芸術家。イメージーションで立ち向かえ」

比良木 「どうということだ」

瀬条 「比良木。なんでもない。

キャッチーなキャラクターデザインとクスッと笑える美大あるあるで、

目指せ発行部数5万部」

比良木 「どうということだ」

角下（蛇ノ目）「西荻窪駅徒歩18分のフロなしアパートで、自称・芸術家が餓

死しているのが発見された。テレビのニュースにも新聞の三面記事に

もならなかった。身寄りの無い彼の死をどうして君たちが知ったのか。

まさに運命。そのアパートは事故物件となり、担当したのは瀬条君」

瀬条「冷蔵庫の中身はからっぽだった。冷凍庫の中身はからっぽ…じゃねえぞ。

なんだ、なんだコレ。タラバガニ？」

鹿伏 「タラバガニだ」と。

瀬条 「タラバガニだよ。」

鹿伏が准教授の就任祝いに俺たちみんなにご丁寧に送ったやつだ」

鹿伏「タラバガニだと」

瀬条「どうして喰わなかった」

房毛「鹿伏：俺がいつか、お前を超える芸術家になった時、お前に送り返してやろうと思ってるな」

鹿伏「お前は、とっくに俺を超えているよ。食え。食え」

房毛「真夏の突然の脱水症状。気がつきや体も起こせない」

瀬条「ここには誰が住んでいたんですか、どんな風に死んでいたんですか？その学生は聞いた。俺は言ってやったよ。芸術家だと。大衆に迎合せず、権力に媚を売らず、己の真実芸術を追求した男だと」

黒渦「…ダメだよ。私は認めてない。芸術家ならせめて自殺、ぎりぎり病死。ひとりで餓死なんて許せねえ。電話一本くれりゃ：マカロン送ってやったのによ」

房毛「電話、もってなかったんだ」

黒渦「生活保護は」

房毛「とっくの昔に打ち切られてる」

黒渦「この話、ナシ。やめよう。おい、房毛、誰がなんと言おうと、お前は死んでないからな」

房毛「身寄りの無い俺の葬式は、民生委員の事務仕事。頼む。黒渦、俺の葬式でおしっこしてくれ。大便だっていい。このままじゃ、みじめで死にきれねえ…」

房毛は土下座で頼み込む。

黒渦「死んでねえって言うてんだろ」

瀬条「黒渦。おしっこしてやれよ。宇丸はそれを撮るんだよ。」

それが何よりのハナムケだ」

黒渦「死んでねえよ。死んでたまるかよ」

宇丸「泣いてんじゃねえ。涙の分までおしっこだ。」

志半ばで頓死した、かつての仲間の葬式で小便すりゃ、お前はさらに伝説となる」

黒渦、土下座する房毛に放尿。

黒渦「おしっこ、しー」

しかし、

黒渦「あれ？…尿道が。私の尿道が…」

瀬条「尿道、拝見！」

瀬条による尿道チェック。どうやら見当たらない。

瀬条「ひーらーきー」

比良木「…PTAの皆様から苦情が来るんだよ。黒渦。」

お前の尿道と肛門は大人の事情の自主規制」

黒渦「おのれ！くたばれ！」

比良木「だまれ！あばずれ！」  
瀬条「房毛の気持ちを考えてろ」  
比良木「安心しろ、房毛。お前のドン引きな死に様も、俺の漫画の中じゃ、ドタバタギャグ要員  
ことに。お前はいつまでも、俺の漫画の中じゃ、ドタバタギャグ要員  
なんだよ」

突如、現れた恩師・蛇ノ目（姫益）。

姫益（蛇ノ目）「比良木くん。そこにアートはあるのかい？」

比良木「今は亡き、忌まわしき、恩師の幻影」

姫益（蛇ノ目）「比良木くん。そこにアートはあるのかい？」

比良木「消えろ、消えろ、つかの間の灯火」

姫益（蛇ノ目）「漫画というツールで君は、己の世界を外へ外へと開いているつ  
もりだろうが、己と向き合うその作業、内へ内へと閉じてるに等しい」

比良木「どうしたらいいんですか、先生」

姫益（蛇ノ目）「しっかりしたまえ。私は君が描いたイラスト。体はアシスタン  
トに描かせているが、顔は君が描いたもの。語る言葉は…こりや担当  
編集の意見が多分に入っているね」

比良木「すみません。ネームと下書きでで手一杯…」

姫益（蛇ノ目）「しっかりしたまえ。私は君の創造物。君を生き写す鏡の恩師。  
受けた質問をそのまま跳ね返す平面鏡」

比良木「どうしたらいいんですか、先生」

姫益（蛇ノ目）「比良木くん。君と僕と蛇ノ目ゼミ。複雑怪奇な三面鏡の彼方に、  
己の横顔を見つめる覚悟があれば、ああ悩めるゴツ木の君。その耳を  
削ぎ落とす必要はない」

その一言が、比良木を怒らせた。

比良木「…誰がゴツ木だ。俺が好きなのは鳥山明。

七つのボールを集める摩訶不思議アドベンチャーの果ての果て。  
ギャルのパルティ求める子豚野郎の侘しさに、  
少年少女の夢を見るんだ！」

比良木がG。ペンを振り回すと、姫益が妊娠する。

姫益「妊娠したわ」

瀬条「ここはいつかのゼミ合宿…」

鹿伏「人騒がせの想像妊娠…」

比良木「神をも恐れぬ妊娠の創造」

姫益「妊娠したわ」

瀬条「落ち着け、姫益。」

お前の切なる信仰心もここじゃ単なるナンセンスギャグ」

姫益「神の子よ」

鹿伏「大地を揺るがす、たしかな胎動」

瀬条「神無き時代に、時代遅れの宗教絵画」

比良木「いやいやこれは週刊連載」

姫益 「色彩豊かなアートの世界。私は真のマリアとなる」  
鹿伏 「させるものかよ、流産パンチ」  
比良木 「満場一致で自主規制（鹿伏のパンチをペンで止める）」  
姫益 「ようやく夢が叶ったわ」

あたりはゼミ合宿の風景に。

鹿伏 「覚めない夢など悪夢に同じ」  
瀬条 「ここはいつかのゼミ合宿」  
盾子守 「三泊四日の伊豆下田」  
黒渦 「淫靡な真夏の夜の夢」  
一同 「ヒュー！ヒュー！」  
角下 「黒渦と宇丸がとんずらこいた」  
筒美 「海辺でペロペロやってんだ」  
志免 「信じられない。ちよっと私、見てくるわ」  
一同 「ヒュー！ヒュー！」  
角下 「鹿伏と筒美がとんずらこいた」  
宇丸 「海辺でモチモチやってんだ」  
志免 「ほんとお盛んなんだから。学生の本分は学業だっつーの」  
房毛 「残ったみんなでアートについて、朝までとことん語り合おう」  
一同 「乾杯！」

浜辺で乾杯するゼミ生たち。

戸白 「なんだ、この、日常系ほのぼの場面は！  
こんな通俗的な場面が混ざっている理由がわからん……！」  
瀬条 「読者アンケートの結果が多分に反映されている」  
鹿伏 「ハートを打ち抜く真夜中のマシガン」  
角下 「アートの未来にゲルニカの阿鼻叫喚」  
房毛 「俺とお前と大五郎」  
宇丸 「二日酔いからの向かい酒」  
盾子守 「大切なものが抜け落ち続ける」  
黒渦 「シャガールみたいな青い夜」  
姫益 「残酷極まる神様がくれた」  
筒美 「学生の最後のプレゼント」  
一同 「朝まで語り合う13名。乾杯！」

苦悩する戸白。

戸白 「やめろおおおおおおお……！！！！  
比良木……楽しかった俺たちの思い出を……  
重版出来るなああああ……」

流れる涙も拭わずに、比良木はペンを走らせる。

比良木 「漫画は記号の集合体：印象と記憶のフラッシュバック！」

そこは、学生時代に戸白と盾子守が済んでいたアパート。

戸白 「ハッと気がつきや小田急線。囚われし向ヶ丘遊園。

家賃、光熱費、まるまる折半、食費は別のルームシェア。

眼球に石膏を塗りたくる俺を、耳にモルタルを流し込む俺を、口と肛門にアクリル樹脂を詰め込む俺を、盾子守…。

お前は自殺願望のメンヘラちゃんだと誤解した。違う。

サランラップで顔面ぐるぐる巻きにしながら、俺は感性の密閉保存を考えていた…」

キッチンで自炊する盾子守の姿が消えた。

戸白 「これは…特別読み切りのテンポ感…」

比良木 「打ち切り前の悪あがき…」

戸白 「命尽きる前の走馬灯…」

比良木 「パラパラ漫画にもなりやしねえ…」

戸白 「終わらないゼミ合宿にも…終わりが来た」

比良木の原稿用紙の上で、かつてのゼミ生たちが語り出す。

瀬条・姫益 「発行部数の落ち込みは、坂の上の雲を眺むる紀尾井坂」

盾子守・房毛 「この連載が肅々と終わる」

角下・志免 「奇跡の瞬間を十三年」

宇丸・黒渦 「当たり前前に続いていた連載も、もはやこれまで」

比良木は原稿用紙に向かって吠える。

比良木 「…ごめん、もうこのゼミは、もう御披楽喜」

鹿伏・筒美 「突然出て来た遺言状4億円。」

先生の意志を継ぎ、美術館は完成した」

それこそが、切羽詰まった比良木の描いた妄想である。

比良木 「だめだ、俺たちの夢の美術館。ぶち壊す」

鹿伏・筒美 「差し替えろ。そんなもん描く必要はねえ」

瀬条・姫益 「これはアートのゴキブリホイホイ」

盾子守・房毛 「一網打尽の掃討戦」

角下・志免 「すなわち夢の美術館は」

鹿伏・筒美 「自意識とモラトリアムに群がる」

一同 「共食いの害虫」

瀬条・姫益 「そうか、これは罠だった」

鹿伏・筒美 「己の名声を後世に残そうというつまらん恩師と」

盾子守・房毛 「恩師の名声を後世に残そうとしたゼミ生13名の」

角下・志免 「滅び行く、師弟愛」

一同「ノスタルチズムのワームホール」

それでも漫画を終えようとする比良木。瀬条の悲鳴。

瀬条「戸白。どうにか俺たちの夢を永遠の中に閉じ込めることができなにか」  
戸白「過ぎ去る一瞬、一瞬をどうしたら閉じ込められるのか。」

そのやり方を考え続けた美大の4年間。まだ応えは見つからない」

瀬条「俺は芸術家じゃない。芸術家になり損ねた男、そして、芸術家への憧れが強い男だ。お前がこの世界を閉じる手段を見出すまでちよっぴりオセ  
ンチなストーリーでの時間稼ぎ」

比良木「や、やめろ、これは少年誌だぞ…」

瀬条と志免が語り出した。そこは中央線のホーム。

瀬条「その日は卒業間際の最後のゼミコンパ。俺たち13人は、新宿駅西口徒歩5分の居酒屋で朝まで飲み明かしたっけ。高尾方面行きは一時、運転を見合わせていた。人身事故を引き起こしたやつにどんな悩み苦しみがあつたかは知らないが、俺は線路に飛び込んだ勇氣、あるいは狂気に心から感謝する。俺は、地元に戻って美術教師になるあいつに言いたいことがあつたんだ。…なあ、絵はやめるのか？」

志免「教職課程がほしかったただだから…」

瀬条「嘘だ。絶対に嘘だ。嘘つき。俺は知っている。伊豆半島でのゼミ合宿。」

アート、デザイン、グラフィックについて朝まで語り合ったじゃないか」

志免「…覚えてる」

瀬条「わざわざ上野の国立美術館まで行って、ゴーギャンの悪口を言い合ったじゃないか」

志免「…覚えてる」

瀬条「絵筆を持つ手が震えるんだと、白いキャンバスが怖いんだと、それでも絵を愛していると、泣きながら電話をくれたじゃないか」

志免「覚えてる」

瀬条「だったらどうして…盛岡の公立高校の美術の非常勤講師、手取り16万を選び、アーティストとなる輝かしい未来を捨てた」

志免「ねえ…どうして私が美大に入ったかわかる？ 美大生とエッチがしたかったからよ。どうして私が蛇ノ目ゼミに入ったかわかる？ ゼミ合宿でエッチがしたかったからよ。どうして私が盛岡の非常勤講師になったかわかる？ 男子高校生とエッチがしたかったからよ」

瀬条「…」

志免「何がアートよ、何が芸術よ。私に教えてくれたのは、みじめな女の本性だけ。今こうしている間にも、あなたに抱かれないという妄想、誰にも止められぬ中央特快」

瀬条「俺は今、どんな顔をしているんだろう。鏡を見る勇氣はない。誰か、俺の顔を作品にしてくれ」

戸白「駄目だ、これはすでに過去のもの。時は常に先へ先へと進んで行く…。  
そうだ。ノスタルチズムのワームホールから、抗えぬ運命を先回り」

駆け出す戸白。語り出す筒美。

筒美 「私の指が奏でるバイオリンの音色は神の歌声」

瀬条 「筒美さん？」

筒美 「その類い稀なる才能から京都の神童と謳われ、私を指導した音楽教師は次から次へと精神崩壊。」歳ですでにオーケストラデビュー。周囲からはドイツの音楽大学への進学は間違いないと言われていたが、それにはひとつ、大きな問題があった。まさに悲劇。私の才能は、音楽だけに留まらなかった」

瀬条 「おい…鹿伏」

筒美 「バイオリンと同時期に始めたクラシックバレエでもその能力を発揮し、私を指導したバレエ講師は次から次へと消息不明。バイオリンとバレエ、音楽と舞踊。天が与えた忌まわしき二物のせいで、両親のセックスライフは終わりを遂げた」

瀬条 「お前のカミさん、どうしちゃったんだ？」

筒美 「すでに両親の不仲と疲労がピークに達していた13歳の冬。」

筒美 「母親は殺人未遂で逮捕される」

鹿伏 「やめろ…」

筒美 「私は母親をかばい、無罪を主張したが、かばったところでどうしようもない。厚さ1.5mmの銅板をも切り落とす万能バサミで、睡眠中のひとり娘の左足の小指を切断する女なんて、どうやってかばえるんだ」

鹿伏 「小梅。もう帰ろう。帰ってメシ作れ、フロ湧かせ」

筒美、鹿伏を右足で蹴りとばす。

筒美 「痛い…あまりの痛さにベットから飛び起き、バランスを崩し、足を滑らせ、フローリングの床に頭を叩き付けた。バレリーナが聞いて呆れる。左足の小指がなくなっている？ 理解はできたが、納得はできかねる。馬鹿な。夢だ。これは夢だ。でも痛い。痛いぞ、夢じゃない。「ママ」この時は、まさか、同じ部屋に寝ている母親が犯人だと思っちゃいけないから、私は母親に助けを求めた。「ママ。足がー、足が痛い」部屋の電気がパツとついたら、私を見下ろす四十路の女。両足でしっかりと直立不動で私を見下ろし母親は言う。

鹿伏 「大丈夫よ」

筒美 「いや、何が？」

鹿伏 「救急車は呼んでおいたから」

筒美 「弁護士のおサダさんからあとで聞いた話だが、母親は事件を起こす前に救急車を呼んでいた」

鹿伏 「救急です。救急です。娘がふざけて足の小指をハサミで切ってしまった」

筒美 「ふざけてハサミで足の小指を切るかよ。当時の私は13歳」

鹿伏 「大丈夫よ。救急車は呼んでおいたから」

筒美 「母親は笑い、いや、笑ったのかアレ。あの顔を笑顔と定義していいのかわかるとにかく笑ったな、笑いやがったな、とその時は思ったね。笑った母親は、真つ赤な塊を私に見せた。「あ、私の足の小指だ」と、思うわけないよね、その状況で「私の足の小指だ」なんて、信じられるわけないよね。母親は、私の小指を、べろりと、口に含むと、ごっくん」



でも虫酸が走る」

筒美は比良木にせまる。

筒美 「おい、漫画にしてくれよ！ウエルカムボード、書いてくれたじゃん」  
比良木 「ごめん：やっぱりこのゼミは、御披楽喜」

筒美 「貴様ああああ……！」

比良木 「高天原市現代美術館は、打ち切り、ペしゃんこ、取り壊し！」

美術館を取り壊そうとする比良木。仁王立ちで立ちはだかる鹿伏。

鹿伏 「並べ、まとまれ、一列に。固まって行くぞ、籠城戦」

一同 「鹿伏」

鹿伏 「俺は。いつかこんな日が来た時に、お前らの盾になるために大学に残ったんだ」

筒美 「やめなよ、太郎ちゃん」(鹿伏に並ぶ)

一同 「筒美」

筒美 「この13人の中で一番才能があるのは私。そして、私の才能を憎んでいたのも私。私の才能を叩き潰して頂戴」

瀬条 「ニヤロメ」(同じく、二人に並ぶ)

一同 「瀬条」

瀬条 「腐っても俺はゼミ代表。ゼミ代表として、お前たちの先頭に立たせてもらう」

房毛 「どすこーい」(同じく、並ぶ)

一同 「房毛」

房毛 「自称・芸術家と人は言う。しかし芸術家とは、己をそう定義することから始まるのだ」

姫益 「アベマリア」(同じく、並ぶ)

一同 「姫益」

姫益 「私のお腹には、神の子がいるんです」

志免 「わーい」(同じく、並ぶ)

一同 「志免」

志免 「心ムラムラ、股キyunキyun」

盾子守 「ハートにコミット」(同じく、並ぶ)

一同 「盾子守」

盾子守 「ニューヨークはアートの関ヶ原」

角下 「おじゃましまーす」(同じく、並ぶ)

一同 「角下」

角下 「俺はノリだけで生きている。この演劇だって、中盤からよくわかってな

い。でもなあ、大学の同期が雁首揃えてウエイウエイしてるなら、乗るしか無い、このビッグウェーブに」

ゼミ生たちはスクラムを組む。その先頭に躍り出る黒渦。

黒渦「おしっこー」

一同「黒渦」

黒渦「共に立て、芸術家諸君。このアイドル芸術家、黒渦未唯が芸術の最前線にいるのだぞ。アートはアクティビズムと共にある」

比良木の攻撃。黒渦は倒れる。駆け寄る宇丸。

一同「く、黒渦ー」

黒渦「お前は逃げる：アシスタントだろ」

宇丸「アシスタントじゃねえ、恋人だ」

黒渦「恋人なら、カンチョー持ってこい」

宇丸「カン：」

比良木「だから、肛門は自主規制」

宇丸「くそ。みんな協力してくれ」

瀬条「わかった」

宇丸「レンブラントにフェルメール、ルーベンスからのベラスケス：」

一同「：？」

宇丸「やってくれよおお」

瀬条「それなに：？」

宇丸「バロックだよ、バロック、バロック。16世紀後半からイタリアを中心に巻き起こった芸術活動。バロック。お前はよ、こいつ（黒渦）のことを、ただのノリで生きてるサブカル系ビッチだと思ってるかもしれない。でもな、意外と西洋美術的な方面においては、バロック期に見られる大胆な空間構成が大好きなんだよ。可愛いだろ。例えて言うならキヤバ嬢がプラダのバックにアップリケを刺繍してるみたいなものだ。よし、今の一言はなかったことにしてくれ。とにかく、バロック期に活躍した画家の名前を繰り返すことで、黒渦未唯は現代芸術家としてのエネルギーを取り戻すんだ。いくよ、せーの」

一同「レンブラントにフェルメール、ルーベンスからのベラスケス」

レンブラントにフェルメール、ルーベンスからのベラスケス：」

呪文のように唱えると、黒渦未唯の肉体が蘇る。

黒渦「バロック：素晴らしいバロック。ルネサンスに対抗し、従来の価値観を肉感的、劇的に描くことに成功したバロック：」

宇丸「来た来た来たー」

黒渦「ハンス・ベルメール！」

…。

鹿伏「いやいや、」

一同「ハンス・ベルメールは20世紀を代表するドイツの芸術家。シュルレアリストに分類されるわけだから、バロック関係ないやーん」

一同、大爆笑。

房毛「いや、ハンスで。バロックからのハンス・ベルメールでオイ。

そういう角度からボケられたら美大生たまらんわ実際…あれ？」

房毛が客席を見るが、

房毛「…全然笑ってない。なんで？ 鼓膜、破れた？」

瀬条「あ、美大出てねえからだな。もったいないわー」

一同、アートに関する知識のない観客を見下す。

房毛「もったいねー。今のくんだり、美大生だったら、腹わたよじれてるぜ」

瀬条「キュビズム。はらわたよじれる感じ、まさにキュビズム」

鹿伏「21世紀にあらわれる」

瀬条「キュビズムの新提案」

房毛「キュビズムの明日に」

一同「かんぱーい」

ビールジョッキで乾杯する一同。苦惱する戸白。

戸白「これはいつかのゼミコンパ…」

比良木「笑笑、町田西口店…」

戸白「学生限定もりもりコース」

比良木「一人サンゴー飲み放題…」

戸白「比良木…お前の漫画は詰まらん思い出でデッサン乱れっぱなしだぞ」

比良木「ごめん」

姫益（蛇ノ目）「しかし優れた彫刻、絵画という物は空間の歪みや不整合性まで

も味方につける」

戸白「そんな荒技、僕にできるでしょうか」

姫益（蛇ノ目）「戸白くん…君ならできる」

戸白「先生ができると言うなら、きつとできるんだろう。」

あの日、僕は、恩師の言葉を胸に秘め、時間と空間と世界観の大いなる矛盾を味方につけることにしたんだ」

スクラムを組み高天原現代美術館の取り壊しを阻んでいるゼミ生たち。その列に比良木の姿は無い。

比良木は漫画のラストページを描き進めている。

瀬条「あの夏も記録的な熱さだった。輪ゴムみてえなヤキソバと薬品くさい発泡酒を寝不足で弱りきった胃袋に流し込みながら、必死に色、形、光、素材と向き合った。あの夏も記録的な熱さだった。ナマっちょろい素肌

とハイブリーチで痛んだ髪の毛を殺人的な灼熱の太陽で焦がしながら、絵の具とウレタンと石膏にまみれた。あの夏も記録的な熱さだった。鼻血と血尿に悲鳴をあげながら…こんなことやってないで、早く新作を作ろうぜ」

鹿伏 「新作をつくるために、こんなことをやってんじゃねえか。おい。俺は目が悪くなったみたいだ。大学でシラバスとレジュメばかり作ってきせいだ。おい、あの美的センスのかけらもねえオブジェは、なんだ。誰かの作品か？」

瀬条 「誰の作品でもない。現実だ」

鹿伏 「ゲンジツだと？」

美術館を取り壊すのに、アーティストを蹴散らすのに、戦車が出てくるのかよ。比良木。なんだよ、この漫画、いくら発行部数を延ばすためだからって、この展開じゃ売れないぞ。お前の好きな、努力・友情・勝利はどこにいった」

比良木 「うわああああ！」

比良木、ペンを振りかざし、かつての友垣を蹴散らそうとする。しかし、皆、微動だにしない。

比良木 「！」

戸白 「安心しろ、皆。」

ノスタルチズムのワームホールから抗えぬ未来を先回り。

比良木が俺たちの過去を未来に開いていくよりも速いスピードで俺たちの未来を卒業制作に閉じ込めた」

気がつけば一同、合掌の姿勢。

戸白 「鹿伏は恩師というタイトルで、毒にも薬にもならねえ、蛇ノ目先生の肖像画を描いたがな、俺はブラックフォーマルに身を包む、俺たち十三人の姿を版画にした。タイトルは『御披樂喜』。大学の連中は、殺されちゃった先生への深い哀悼の意を表した作品だと思っただが、違っんだ。誰もわかつちやいない。これは十三回忌法要。現世に存在しない十三年目の十三回忌で再会した、幻の俺たちさ」

赤根が語る。

赤根 「意図しないデッサンの狂いこそ、超論理的なイマジネーションの扉を開く」

比良木 「赤根…学生時代、一度も口を開かなかったお前が、どうして声を出せる」

瀬条 「漫画ならではのずちいフィクション？」

赤根 「いや、違う。忘れたか。僕の実家は岐阜で四代続く運送会社」

鹿伏 「つまりこれは…」

赤根 「パパとママとおじいちゃんにお願いして出版社の重役に袖の下。僕の台詞を増やしてもらった」

鹿伏 「ああおそろしき、資本経済の…」

赤根 「(遮り) 聞いてー。しゃべるから聞いてー」

一同、赤根の話聞く。

赤根 「どんなに広く複雑な地図でも、色鉛筆が四色あれば、塗り分けられる。しかし、それは、平面上に限られる。立体的な僕たちの、僕の青春は、色鉛筆が何本あっても足りないのだ」

色鉛筆を空高くぶちまける赤根。

盾子守 「赤根君が塗った私たち十三人のぬり絵は：ニューヨークで100億ドルで落札された。青春の空白を色鉛筆で埋めること、それこそ彼の業」

色彩豊かな空間で、語り出す瀬条。

瀬条 「健やかなる長生きではなく、悠然たる長死に。長死に：ああ、つまらん。つまらん造語。

ドキュメンタリーもルポルタージュもノンフィクションも真っ平だ。漫画にしろよ。アニメ化しろよ。ドラマ化しろよ、比良木。

長谷川町子先生以来の国民栄誉賞がもらえるチャンスはすぐそこだ。」

鹿伏 「今宵、因果の糸にたぐり寄せられた、かつてのゼミ生十三名。恩師の変死から十三年後、十三回忌の夜に、運命の再会を果たしたのだった」

鹿伏 「今宵、」

一同 「因果の糸にたぐり寄せられた、かつてのゼミ生十三名。

恩師の変死から十三年後、十三回忌の夜に、運命の再会を果たしたのだった」

しかし、

宇丸 「いないんだわ」

一同 「え？」

宇丸 「十三人…いないんだわ」

一同 「え…まじだ」

瀬条 「にのしろのはとのじゅうに、わお」

筒美 「比良木君」

一同 「ひーらきー」

ふらふらと、やって来た比良木。

鹿伏 「なにやってたんだよ」

比良木 「ねてた」

鹿伏 「ふざける」

比良木「…慢性寝不足の栄養不足。まどろむ仕事場の窓から差し込む朝日。いつかのお前らの面影を網膜に焼き付け東京の空へと影送り…」

鹿伏「今宵」

戸白「僕らは卒業制作のその中で」

鹿伏「今宵」

戸白「何度でも再会し続けることができる」

鹿伏「今宵」

一同「因果の糸にたぐり寄せられた、かつてのゼミ生十三名。

恩師の変死から十三年後、十三回忌の夜に、  
運命の再会を果たしたのだった」

見事に決まった群唱。しかし、

鹿伏（蛇ノ目）「ブラボー。ブラボー」

恩師の乱入に戸惑うゼミ生たち。

瀬条「あ、先生、そういう雰囲気のあるじゃないんです…」

鹿伏（蛇ノ目）「みなさん。これが私の弟子たちです」

瀬条「いや、先生。そういうあれじゃないんですけど…」

鹿伏（蛇ノ目）「さて、これよりギャラリートーク…演劇の場合はアフター  
クと  
言うようだが、ぜひ私も君たちの師として、二点ほど質問させてもらい  
たい」

瀬条「はあ…」

鹿伏（蛇ノ目）「ひとつは…肉体とは何か？」

一同「にくたいとはなにか…」

鹿伏（蛇ノ目）「思考しろ。思考し続ける」

一同「…」

鹿伏「そして、ふたつ目は…」

これは観客の皆様にも考えてもらいたいのですが…  
劇場は何故、劇場であることを辞めないのか？」

観客席を睨みつける蛇ノ目（鹿伏）。

マジで困惑するゼミ生たち。

瀬条「…あの…先生…」

鹿伏（蛇ノ目）「むっどうした？」

瀬条「もう…帰ってください」

鹿伏（蛇ノ目）「瀬条くん。それはつまり…」

瀬条「あなたは…」

一同「十三年前に死んでいます」

『御披樂喜』

舞台上に、ただ立ち尽くす、ゼミ生。変態13名。

軽快なミュージックとともに、隊列を組んで退場。

角下「終わりです」

舞台上から、誰もが姿を消す。

了

※ 上演を希望する際は、有料・無料に関わらず、必ず劇団までご連絡いただき、戯曲使用の許諾をお受けください。